

## K, Leena 先生の授業 「国語 School Race」 K 公立小学校 4 年生 38 人 (2 クラス)

1 クラス 19 名で 2 クラス合同 (39 名) —教師 2 名の Co-Teaching— 2018 年 10 月

レポート (大阪教育大学 柏木賀津子)

### 1. Functional Learning

Functional Learning とグループスキルの育成を狙いとした授業である。グループで Leena 先生が出す Cue (質問のミッション) を読み、協力して生きた語彙を学び、母語における文法の特徴に気づいていく。「School Race」と名付けられたロング (45 分×2) の取り組みである。日本の一般的な手法との異なりだと考えられる点は、

- 1) 2020 年への学習指導要領の変遷を理解した、Functional Learning (FL) としての明確な位置づけがある。
- 2) 10 歳はフィンランドの自律学習者としての集大成時期である。自分がグループにどう貢献できているかについて、12 個の観点の評価項目を理解し、自分の学びを省察し話し合わせ、自己評価をする。
- 3) 1 人 1 台のタブレットを文房具のように使いこなし、Race のレポートと写真をその場でアップロードする。
- 4) WEB 上での家庭とのデジタル連絡評価ツール (WILMA) で保護者に Real Time に近い形で生徒の達成を褒めたり、助言を書いたりする。教師—生徒—保護者と、3 者を結び学びが高まるようにしている。
- 5) 母語のフィンランドの言語機能に、活動をとおして気づかせ、最後に文法の特徴を理解させる (日本語でいえば、「れる」「られる」の使い分け、敬語の使い分け等、高学年でも間違いやすい項目のようだ)。

なぜ FL における評価項目は大事かということを生徒と保護者と共通理解をしている。フィンランドでは教師だけが教えて生徒を伸ばすという発想は過去のものになりつつあるようだ。学ぶのは生徒であり、教師や学校カウンセラー、特別支援の専門家が個に応じたプログラムを運用し、家庭はそれを支える。評価は、ルーブリックに基づき色で表す。Red Circle—Orange Circle—Green Circle、つまり、赤の○、橙の○、緑の○と高めていく)。以下の写真は、Race で使う 7 つ程度のグループ Task である。



Task (○○というスポーツ選手の道具を探すには)



Task (グループで目当てを読む)



Task (フィンランド語の文法を使いわせる)



Task (グループで)

教師は、自分が取り組んでいる学習形態の価値をよく把握し、見学にきていたドイツの校長先生方に英語でコツを説明しながら (生徒にはフィンランド語で指導)、38 人の生徒のそれぞれのグループの質問を聞き、ファシリテーションを的確に行っていた。フィンランドでは「Edu-Port」等で、世界の教育に貢献したいと思う教師は多く、グローバル時代の教師として他国からの教員との議論は楽しみだという。筆者は前日に中学校の他の授業を参観するために尋ねたが、中学校の方はあいにく参観が叶わなかつた。中学校の授業公開は意外に困難であった。代わりに 9 歳 (小学校 3 年生) の英語を学び始めたばかりの小学校の英語授業を参観したあと、カフェルームのようなオープンスペースで、Leena 先生にコーヒーを入れていただいた。フィンランドに「言葉の授業」

を学びに来たと伝えたことがきっかけになり、「明日、授業に参観にきませんか。」とお誘いいただいた。フィンランドでは外部からの参観者は、大きなグループでない限り、特に管理職に伺いをたてる必要はなく担任の裁量幅が大きい。情報は学校内のメールで共有している。Leena 先生は、特にこの日のために FL を用意するのでなく、9月からでも既に7種類以上の FL を進めておられ、生徒らの自己評価を覗くと、どの授業も「最高に楽しかった」のところに○をしている。Leena 先生は、英語の先生でなく学級担任だが、英語専科となられても大丈夫な英語力を持っている様子であった。英語の専科は別におられ、得意な教科2～3を中心に交換授業を組んでいることが多い。

## 2. 「School Race」の授業の進め方

この方法は、工夫すれば、L2の英語でも出来る構成であった。Leena 先生も、理科や生物の観察、健康プラン、人命救助プログラムなど、様々な学びにこの方法を活用しているとのことであった。「Amazing Race」という学びを応用した授業である。フィンランドの授業を観察していると、2020年の学習指導要領が、国民の関心の的になっており、教師もその核心に迫っていくために、同僚と考えた指導を WEB で共有し始めている。わかりやすい楽しいプロジェクト名がついている。今までにも。たとえば「いじめ」を傍観しない（無くすという発想をあまりしない）プロジェクトに KiVA (キバ) プログラムがある。また、小学校英語で絵本とリテラシーを育てる IKI (イキ) というプログラムもある。この School Race は日本の教師ならすぐに、「あ、やったことある、スクールトリップ (学校探検) ?」 その通りで活動は似ているが、母語のフィンランド語の語彙や文法に触れながら、様々な楽しい課題をグループごとに解決させていくという目的があり、このプログラムで何を達成させたいかのルーブリックを作成し共通理解していることが特徴である。中心点は、グループスキルの育成と、言葉への気づき力である。母語であるからといって、生徒は完全に母語を上手く使っているわけではない。母語にある規則や言葉のつながりを探検させながら、協力して見つけさせていく。

まず、活動のねらいを簡単に伝える。次に、グルーピング (活動によって臨機応変)、そして、教師が用意したオレンジのカードに「？」(問い) が書いてあるので読み、学習を進める。

① School (学校) に関係ある単語がたくさん並んだカードをグループで ABC 順に並べる。国語のフィンランド語でも生徒は四苦八苦である。たとえば、英語でいう「ball」と「bat」なら、先頭の文字は b で同じだが、二つ目も同じだ。3つめの文字をみると l と t。あ、そうか。と話し合っている。グループスキルが上手くいくとこのタスクは早い。中にはこのタスクだけでも 30 分もかかるグループが出る。でも、教師は助けない。

② 次の「？」カードでは、「校長先生に挨拶をしようと思ったらどうする？」などとフィンランド語で書いてある。きっと “Hyvaa huomenta” (おはようございます) だろうか？ 筆者も習いたてのフィンランド語を思い浮かべた。「さあ！」と、生徒たちは教室から飛び出した。「？」カードは、4種類以上あるのでどれが自分のグループか当たるかわからない。「○○というスポーツ選手の道具を探すには？」、これが当たったグループは、運動靴に履き替えて校庭に走っていった。フィンランドの学校は全国どこでも、学習では校庭や校外に出てアクティブに学ぶことも多いので、すぐに靴を履き替えられる。クラス用の出入り口が校庭に直結する校舎デザインになっており、学校校舎デザイナーとしての管理職が環境を統括しているモデル校でもある。

運動場に出ると、多くの学年が、スポーツオリエンテーリングなどの言語活動をしていた。おもしろいことに久しぶりの晴れだったので、多くの学年で○○レースが様々な教科連携で行われていた。筆者は一つのグループについていった。校長先生は留守だったので残念そうだったが、扉にカードがかかっており読んでいた。この文章はもう少し長く、

③ 「～～について話しなさい。そして○○歌を歌いなさい。」となっている。生徒らは自分の iPhone は個人で、タブレットは全員与えられているので、

④ 到達場所で写真を撮ったり歌を歌ったりしてレポートする (ICT の創造的活用)。廊下も広くて温かい雰囲気

あるし、あちこちに作業ができそうなソファが置いてある。このようにして、「？」カードはだんだん難しくなる。やっと「？」を終えて帰ってくると、

⑤ 次の「？」がある。間違いのスペルが入っているカードである。グループで協力して探して書き出す。それが終わると、また外へ出かける「？」があった。外に出かけるクイズは生徒は好きなようだ。

⑥最後の「？」は、文章が書かれていて、分かち書きに関するクイズ、母語の文法を上手く見つけて使えたら当てはめて書けるようだ。



ドイツからの訪問者にも  
FLの進め方を説明



終わったグループは個人年間  
プロジェクトをすすめる



一つの教室に2セットの  
PCと電子黒板

全部でタスクは、⑦種類程度以上あり、外に行くタスクは2回使っていたようだ。一連の指導やファシリテーションからは、教師が言葉の文法やしくみを先に教えるのではなく、事例からルールへと誘う UBM（用法言語基盤モデル）の方法に近い要素が自然に見られた。教員らが全員修士号を持っていることから、言語習得の基本理論をよく学んでおり、理にかなった授業が展開されているケースが多い。授業そのものは、「盛り上げる」というような場面はなく、生徒が1人前に出て発表する場面も少ない（例えば、英語などでも淡々と説明する場面があり、高度な技術がふんだんに取り入れられたデジタル教材が6割を支えている。発音と音素、簡単な文法は生徒が退屈しない範囲(10分)で押さえている。デジタル教材と指導書に入っているワークシートをそのまま使って、実によく生徒にペアワークをさせている。言葉を活用するためのタスク活動を取り入れるが、皆の前での発話は強要しないという流れは、言語習得と発達段階をよく踏まえている）。母語の国語では、当然だが、グループ活動中のインターアクションは十分で挙手は大変多い。スピーチを準備し発表することもあるが、読む活動を踏まえた即興場面での発話を大事にしており、生徒は考えたことについて、とても長い話しが出来る。フィンランドの授業はどの教科でも、小グループでよく話をする。議論をする。議論をして考えると、情動に働き、認知スキルが働きやすく、転移しやすい(Transversal)という実証データに基づいているようだ。こういった根拠についての教師もさらに話をする。専門分野について、毎年3日以上、国や自治体の研修に参加して学ぶそうだ。

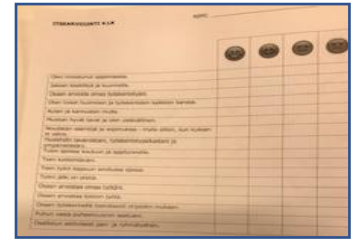
グループの活動の様子では、生徒らは一人残らず活動し話し合いに参加して、グループに貢献していた。最後の⑦のタスクでは、4年生で学ぶ中心点に到達していたようである。早くできたグループはハイタッチして喜んでいた。ここで、終わったグループは、「先生、次に何するの?」とはたずねない。自分のPCを出して、今作っているストーリーブックにとりかかった。年間6冊の本をよく読み、自分のストーリーを作るロングプロジェクトが個人に任されている。一方、タスクの1~7の、まだ第1段階のグループはあきらめず頑張っている。進度はお互いあまり気にしていない。この間、教師はどの生徒がどのように協力しているかよく見ている。そうこうすると、ドイツからの視察グループ(校長先生)がさらに増えて、20人ほど入って来られた。PC環境など見ていたが、タスク1が出来ていないグループにフィンランド語で助言を出しながら、ドイツの教員に、授業の意図などを英語で説明したり議論したりしていた。しかし、外部の訪問者に気を取られず、生徒がタスクから戻ってきたら、いち早く目を注ぎ的確なファシリテーションをしていた。先生の中での優先順位はあくまで、生徒の学びを前に進めることである(他のEU諸国の授業を参観すると、訪問者は管理職、またインスペクターの目に気を取られている様子が見られる。フィンランドでは、教師はそのような方法で評価されるのではなく、国に信頼され教育を任されている立場であるので、信条がぶれないのであろう)。実によく生徒が伸びるようにファシリテーションをしている。生徒は、お昼の時間が来たので、そのグループでカフェテリアに食べにいき、13時に再び

集合となった。次にじっくり自己評価をする時間となった。

### 3 WILMA を使った評価ルーブリックの活かし方

Leena 先生は自作の自己評価シートを見せてくれた。評価の観点は、

- 1) この活動で友達の良さを見つけられたか
- 2) 自分の役割を果たせたか
- 3) 皆、同じぐらい以上力を出せたか
- 4) 自分から行動できたか。



じっくりと省察（自己評価）

評価は毎回せず、季節に 2 回ぐらいで、今日は久しぶりとのことである。「毎回はしません。毎回は声でのその場のフィードバックを大事にしています (Ongoing であることが大事)」ときっぱり言われていた。評価シートを渡す前に、先生は生徒らと十分なやりとりや意見を言わせてから始めた。自己評価をする前にこの学びで何を見つけたか内容について深めている。例えば、「上に点々・・がついた母音 ä」や二重母音の ö (löyly) の発音 [ø] は生徒らでも難しいそうだ (私はまだ出来ない)。Leena 先生のポートフォリオを見ると、8 個程度のこの秋に行ったプロジェクトが書いてある。すべて同僚先生たちの編み出した計画とのことである。私には保護者との評価のやりとりをする WEB ツールを見せて、どう使うか話してくれた。実に、Leena 先生一人で 3 人前の仕事をしてきた (その場で終わらせる、紙ベースで二重の連絡はしない)。これは WILMA というアプリで、グリーン Circle オレンジ Circle レッド Circle を使っている。「一人でどのようなグループでも協力して意見を述べたりできる」が、グリーン Circle になる。保護者は、教科やプロジェクトへの子供の取り組みの様子を家から見るができる。いくつかの教科でまだオレンジという生徒もいて、親は自分の子供のグループスキルがグリーンに伸びるように一緒に協力をされるようだ。社会においてグループスキルは重要であると理解している。またフィンランドでは両親ともフルタイムの職業を持つケースが多く忙しい。学校の助言をしっかりと聞いて、自分の子供が伸びるように仕事の合間にも WILMA を見ているという。その横には、Leena 先生と T2 の先生が細かいコメントをタイプしていた。気づいた時に書き込んであげるそうだ。保護者とも出来る限り Ongoing が大事だという。カードの間には、音韻の特徴や、フィンランド語では場所には ~ista (= 出身です) という表現がある。例えば私は日本出身なので、Olen Kotoisin Japanista. で -ista となる (フィンランド語は出来ないため尋ねた結果)。この School Race が終わると、ICT で教師が作成した文法の使い分けゲームを WEB で配信する。Quizlet や Kahoot などは全教師が頻繁に使っており、自作の WEB 教材を学校のホームページの担任の部屋に置いている。2020 年の新学習指導要領では、小学校～高校まで、すべての教科、すべての担任の先生は、「言葉の教師である」という骨子があり、それへの移行を意識して、試みが既に先取りで始まっていた。また Society 5.0 といった概念はフィンランドの学校では実行されて数年が経つ様子であった。

雑感：グループ活動の進め方は、日本でもしっかり実践されているベテラン教師も多い。以前に英語活動で見せていただいた三重の小学校で、グループで「忍者屋敷トリップ」に取り組んでおられ、良い雰囲気グループスキルを伸ばしておられた。しかし、グループワークでの学びが本当に深まっているのか、英語を使う回数はどうか、という批判も出るなど、グループ活動の評価はふれやすい。そのような際も、上記のような評価ツールやルーブリックを作成していることは重要であろう。また、グループワークと共に「言語スキル」を実社会の文脈で伝え合う環境で育てていく・・・ということが大事だと感じる。日本の外国語科では、伝え合う場面を減らしてでも、文脈から離れた文字の写し書きに時間を割くことが多くなることが懸念される。母語でも英語でも、言葉を使ってみる中で、文法の特徴に気づかせていくよう、教師が理にかなった指導法を研修できる環境を整え、グループで協働させながら言葉力を育てていきたいものである。